

発達障害の理解と支援

～わかり合あって、素敵だね!～



企画：社団法人 日本発達障害福祉連盟

DVD
VIDEO

企画・監修：社会福祉法人 全国発達障害福祉推進連盟
 監修：原 佳子 日本発達障害学会会長
 副監修：社会福祉法人 日本発達障害福祉推進連盟理事長
 飯坂市中部地域療育センター所長 / 医学博士
 湯波 英史 社会福祉法人 日本発達障害福祉推進連盟常務理事
 社会福祉法人 発達協会常務理事 / 早稲田大学客員教授
 協：社会福祉法人 日本発達障害学会

発達障害とはどのような障害なのか？

さまざまな障害の総称である「発達障害」という概念を、その歴史的経緯をふまえて、わかりやすく簡潔に解説しています。また、療育の考え方や支援の要点を中心に、実際の療育現場を紹介しつつ、専門家による説明、現場担当者の話、保護者へのインタビューを交えて解説します。

解説する発達障害

- ① 知的障害
- ② 自閉症
- ③ 高機能自閉症・アスペルガー症候群
- ④ ADHD
- ⑤ LD
- ⑥ 脳性麻痺
- ⑦ 重症心身障害
- ⑧ てんかん

撮影協力団体
 (順不同)

社会福祉法人 全国心身障害児福祉財団 中央愛児園 / 社会福祉法人 青い鳥 横浜市中部地域療育センター / 社団法人 発達協会 / 日本肢体不自由児協会 心身障害児総合医療療育センター / 社会福祉法人 全国重症心身障害児(者)を守る会 あけぼの学園 / 社団法人 日本てんかん協会

(64分) 2008年6月製作

定価 ¥9,450 (税込)

製作・著作：アローウィン 〒161-0034 東京都新宿区上落合1-22-7-102
 tel & fax: 03-3361-6776 e-mail: arwin@nifty.com

イラスト：
 ニノ村祐子

このDVDを権利者に無断で複製、放送、公開上映などに使用することは法律で禁じられています。

心と社会

心と社会

37巻2号

特集

(第20回 日本精神保健会議)

メンタルヘルスの集い

「医療と福祉の連携の近未来像

—精神障害者と共に生きる社会を目指して—」

特集 第20回日本精神保健会議 医療と福祉の連携の近未来像

No.124 2006 日本精神衛生会

2006

124

jamh 日本精神衛生会

日本精神衛生会

〔第4回〕

「障害」を1つの特性と見る
…関心から理解へと進めるために

湯汲英史

(社)発達協会 王子クリニック 言語聴覚士/精神保健福祉士

初めて担当したのは、自閉的な3歳の子でした。この子が30代半ばになろうとしています。この仕事をしだしてから30年余が経ったことになりました。発達協会が開設し、その後独立した作業所などもあり、幼児期から今も付き合いが続いている人たちがいます。

現在クリニックで担当しているのは、4歳から21歳までの子どもや大人たち140名余です。障害の程度は、重度の知的障害を持つ子から、知的障害はないものの不応を抱えた有名大学の付属中学生や高校生もいます。今回は発達障害のなかでも、筆者の付き合いが長く、今でもさまざまなことを考えさせる知的障害を中心に述べます。

「障害児」から
「障害を持つ子」へと

これまでを振り返ってみて、知的障

害分野で一番変化化したことは何かと考えます。人によって考えはさまざまでしょうが、「障害児」から「障害がある子」へと表現が変わったことが一番大きいと、個人的には感じています。この表現の前提には、1人の人間にはさまざまな特性があるという認識があります。「障害がある子」は、知的障害が複数の特性の1つに過ぎないことを示しています。

知的障害ではない
特性への働きかけ

「特性はいろいろ」との認識があれば、料理に関心がある、マラソンが好き、旅行がしたいなどといった、知的障害以外の特性があっても当然となります。そのような認識の変化がベースにあるからでしょう。例えば、絵画や陶器づくり、書、ダンスなど、さまざまな活動への参加機会が増えてきました。

このような活動をさらに充実させる「エイブルベランダBe」が18年4月、金沢市に開設されました。地ビール生産で有名な「日本海倶楽部」(社会福祉法人)の関係施設です。「エイブルベランダBe」は、知的障害がある人を対象とするカルチャースクールです。ここでは絵画や陶芸のほかに、ドラマワーク、太鼓、アートワーク、ヒップホップダンス、クッキングなど13種類の教室があります。パンフには「きっと希望が見つかると、多彩なプログラム。各講師が、あなたの技術と可能性をひき出します」と書かれています。知的障害という特性はあっても、可能性はいろいろな面にありえます。その可能性に注目しての、多彩で新しい活動といえます。

消えゆく「福祉」ということば

ある会議で、親の会のリーダーから「福祉という言葉はどこにいった?」と問われました。心に残る問いかけでした。確かに現状では、「介護」や「ケア」という言葉が「福祉」に取って代わってききました。もちろん「福祉」ということばが消えようとしているのは、「障害者福祉」が完全無欠なもの

になった結果ではありませんが、

介護度合いの測定とケアプラン

筆者は、厚生労働省の「精神障害と知的障害のケアニーズ」に関する研究班に、知的障害分野の協力者として15年度から参加してきました。この研究では、障害程度区分という新たな「ものさし」を作りました。この研究のベースには、介護保険制度の体縁があります。2000年4月から始まった介護保険では、介護度合いを測定し、それをもとにケアプランを組み立てます。このときの評価や介護は、介護ニーズのある人に共通に適用されています。その方法は実務的ともいえます。いろいろな問題を指摘されながら介護の利用者はうなぎのぼりです。これはサービスの理念、システム、サービス内容などが広く支持されていることを示しています。

一方で「福祉」は人間への見方であり、価値観を含む理念・哲学です。理念であり哲学ですから、「人間性を豊かに保つ」とか「人としての尊厳を守る」というように抽象的ではありませんが、重要な概念が語られます。

日本人には、建前と本音があるように

くいわれます。建前話のときにはなかなか決まらないのに、本音がでてくると物事が急ピッチで進んだりします。「福祉」ということばが忘れ去られようとしている理由は、それが借り物の建前論だったからなのかもしれません。確かに建前話よりも、実際の介護が欲しいという、必死で強いニーズがあります。

さらには、関係専門家が障害にばかり目を向けることへの拒否感が、家族や本人にあるようにも思います。障害への過度な注目が、結果的には本人たちを施設に囲い込むことにつながった面があります。

認定調査員に説明できない専門家

話とはびますが、障害者自立支援法を実際に運営するにあたり、介護保険で実務を担当する認定調査員などに障害を説明する必要があるとしました。認定調査員は、実際に知的障害を持つ人に面接し、本人の意向など必要な情報を得なくてはなりません。ところが「知的障害とは何か」ということを、わかるように説明できる専門家がなかなかいません。どうやってコミュニケーションを取ればよいのかを、具体的

に示せる関係者が極めて少ないのです。福祉の専門家いいながら、実際の場面では無力をさらすことになりました。

今後は、これまでの関係者以外の人が、多数関わることになります。子どもたちの障害程度区分の研究も、いよいよ始まります。だからこそ、リアルな障害理解や実践的な技法の開発が必要で、無力さは、これまで「福祉」という言葉に寄りかかかってきたツケなのかもしれません。

「介護範囲」という限定性

「福祉」という発想では、本人を丸ごと、人生までも含めて考えるような傾向があります。ところが介護には、時間や量など決められた範囲があり、部分的であり、限定的です。介護では、関係専門家に全面的に依存できなくなりますが、できない分、逆に一般の人と触れ合う機会が広がるかもしれません。

今回の「エイブルペランダー Be」の活動が、建前論の世界を越え、知的障害はあっても一人の人間であること、まわりの人たちが自然に気づくこと、ということを開待します。障害の専

門家主導ではないこういう活動が、福祉ということばにとってかわるならば、その効果の範囲は大きく、そのほうがよいのではないかと感じます。

興味・関心から自然な理解へと

筆者が勤務する協会では、10年前から主には絵画を教える「造形教室」を開いています。この教室で学び開眼を開いた人や、描いた絵が売れている人もいます。

今年度は、幼児から30歳を越える人まで、70名の人が通ってきています。利用へのニーズが高く、毎年定員一杯の状態です。この教室ですが、最近感じるのは教わりたい人よりも、教えてほしい人が増えてきていることです。

どういこうことかといえ、知的障害への関心を持ち出したアーティストが増え、チャンスがあれば関わりを持とうとしていくと感じます。

アーティストたちは、表現の面だけを見ています。絵を描く本人の行動よりも、できあがった作品に注がれる視線の方が真剣と感じます。作品の評価には独特のものがあり、関わる専門家に對して、本人への見方を変えさせる力を持つことさえあります。

50年近く前のことですが、座敷半に入られれていた子どもを見たことがあります。九州のある市に住んでいたときのことです。その子はダウン症でした。座敷半ではなくても、家の中に閉じ込められ、時々窓から手を出す女の子の姿も見ました。

こういう悲劇は、「障害児」だからどうしようもないという認識から生まれたとも思います。「障害はあるけれども」という見方が広がることは、子どもにも潜むさまざまな可能性を信じさせ、またチャンスを与えてくれます。実際に、絵や書などの作品が、多くの人は作者のことを知らないままに、街中で見ることでできるようなりまして。

障害がある人たちを取り巻く現実の社会は、「競争社会」となってきました。格差があっても当然という認識に変わろうとしています。このような社会にあっても、活動や参加への機会が制限されないことが望まれます。

参考文献

- 1) 湯汲英史:「なぜ伝わらないのか、どうしたら伝わるのか」大揚社、2003

- 2) 石井業、湯汲英史：「自閉的といわれる子どもたち」。すずき出版、2004
- 3) 湯汲英史：「子どもを伸ばす関わりことば26」。すずき出版、2006
- 4) 湯汲英史（編）：「発達障害をもつ子への保育・子育て支援」。明治図書、2006
- 5) 発達協会のホームページ：発達障害を持つ子どもへの医療や指導法等を紹介しています。
<http://www.hattatsu.or.jp>

平成 20 年度
厚生労働科学研究費補助金
長寿科学総合研究事業

多様な世代及び心身の状態に着目した要介護状態の
評価指標の開発に関する研究

発 行：平成 21(2009)年 3 月
発行所：国立長寿医療センター
(愛知県大府市森岡町源吾 36-3)
TEL: 0562-46-2311 FAX:0562-46-8359
発行者：遠藤英俊